

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月17日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520459

研究課題名（和文） 古典文学作品におけるテキスト・談話研究

研究課題名（英文） Discourse Analysis and Text Analysis of Japanese Classic Works

研究代表者

高崎 みどり (TAKASAKI MIDORI)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：60096237

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、これまで積み上げられてきたテキスト・談話研究の成果を、中古から近世までの古典文学作品に応用することである。研究の結果、現代語を中心に発展してきたテキスト・談話分析理論が、古典文学作品を対象としても有効であり、古典文学作品を対象とした研究に、新たな可能性を示すことができた。なお、対象とした作品のジャンルは、物語文学、随筆、説話、演劇と多岐に渡り、分析観点は談話構造、会話表現、接続表現、オノマトペ、引用形式など多様である。研究成果は冊子にし、web上でも公開する予定である。

研究成果の概要（英文）：

This work is based on studies which we have been working on the texts and discourse analyses. We dealt with Japanese classic works from Heian to Edo era. Through these studies, we proved that the theory of text and discourse analysis correctly describes and can apply to the classic works such as tales, essays, narratives, plays and so on. We studied about organization of discourse, conversation, conjunction, onomatopoeia, form of quotation and so on. We plan to publicize the results of this study in a form of our written report and post them on the websites.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：テキスト分析・古典文学作品・文体・文章・日本語史・日本語学・言語学・談話分析

1. 研究開始当初の背景

テキスト・談話分析は、現代語を対象にして

発展してきた。もともとは欧米で始まったテキスト・談話分析であるが、近年は、日本語

の構造や特徴に合わせた新たな枠組み、理論が提出されてきている。しかし、テキスト・談話分析の成果を、古典談話作品に援用した研究というのは管見のところ見当たらない。地の文と会話文の認定や、接続表現の効果を論じるにあたって、文レベルを超えた分析を行うことはなされてきたが、テキスト・談話分析の成果を活かした研究はなされていなかった。古典文学作品の日本語学的な研究といえば、語彙レベル・文法レベルが中心であったのである。

そこで、本研究では、研究者それぞれの関心のもと、古典文学作品にテキスト・談話分析の成果を活かし、古典文学研究領域において、新たな研究可能性を示すことを最終的な目的として設定した。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、テキスト・談話分析の研究成果を古典文学作品に応用し、テキスト・談話分析の研究の拡がりを示すこと、さらに、古典文学作品の研究において、文レベルを超える研究の意義、新たな研究可能性を示すことである。

以上の目的を達成するために、本研究では、中古から近世までの通時的な縦のラインと、物語、お伽草子類、語り物など多様なジャンルからなる横のラインを意識した研究テーマを設定した。

以下、具体的な研究目的を示す。

(1) 古典文学作品研究にテキスト・談話分析の手法を取り入れ、その研究の可能性を示す。

(2) 中古から近世までの作品を通時的に取り上げ、テキスト・談話分析の理論が、時代やジャンルを超えて適用できることを示す。なお、以下に本研究で中心的に扱う作品を示す。

【中古】『うつほ物語』『枕草子』

【中世】『平家物語』

【近世】浄瑠璃作品、歌舞伎作品、『御伽草子』

(3) 作品の理解に関わる音声的、視覚的な要素にも注目することで、よりダイナミックな古典文学研究を行う。

3. 研究の方法

研究開始当初は、日本語学の領域において古典文学作品を対象とした研究が、今までどのように積み上げられてきたかを、定期的開催される例会で共有した。また、テキスト・談話分析研究の理論的枠組みを、全員が理解、共有する機会を設けた。さらに、文学研究者から、古典文学研究の方法や本プロジェクトが設定した目的に対する意見・批評を

聴く機会を設け、テキスト・談話分析が拓く新たな研究可能性を、研究者全員で討議した。

それぞれの研究の開始にあたっては、まずは、分析対象となる資料の選定や収集の基準、その資料をテキストとして用いる妥当性を、研究者全員で確認した。その後、各研究者の興味・関心にしたがって個別の研究に取り組んだ。

個別の研究を進める過程では、定期的な研究会を開催し、個々の研究の深化を行った。また、分析に際し必要な研究資料や参考文献は、研究協力者やお茶の水女子大学大学院生の協力を得て、随時追加を行った。

研究期間の最終年度は、それぞれの研究成果を持ち寄り、時代やジャンルを超えて主張できることを討議し、本研究の成果を確認した。

4. 研究成果

以下、各分担者の研究概要を示す。なお、本研究の成果は、冊子を作成した後、TeaPot（お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション）に掲載予定である。

(1) 中古を対象にした研究

① 『枕草子』（研究分担者：立川和美）

「テキスト分析から考える『枕草子』日記的章段における引用の助詞「など」の用法―「と」の用法との比較を通して―」

『枕草子』日記的章段における引用の助詞「など」を、「と」との比較を通して、その使用意図とバリエーションを観察した。分析の結果、引用の「と」と「など」は、書き手の意図や表現を効果的にするためにテキスト内で使い分けられていた。「など」に関しては、「大体のことを示す」という基本の用法から、例示や婉曲、要約が見られた。さらに、「など」は、言外の意味が込められる場合などに用いられており、「と」が unmarked であるのに対し、「など」は marked な用法であるといえる。

② 『うつほ物語』（連携研究者：星野祐子）

「『うつほ物語』『国譲』における「かくて」の使用実態」

副詞的用法と接続詞的用法に分けて、『うつほ物語』において多用された「かくて」を分析した。まず、副詞的用法は、現場指示的な用法と文脈指示的な用法を基本とする。また、コンテキストの支援を受けることで、状況の共有を積極的に促す語用論的機能を獲得することが明らかになった。

続く接続詞的用法については、物語の連なりにおいて、先行場面との連なりが認められる場合と認められない場合に大別できた。この

ことについては、先行研究でもすでに指摘されていたが、本研究では、「かくて」を介した先行内容、後行内容が、具体的であるか抽象的であるか、並列関係にあるか否かなど、その前後関係を詳細に注目することで、「かくて」の使用のバリエーションを示すことができた。

(2) 中世を対象にした研究

① 『平家物語』(研究分担者：中里理子)

「『平家物語』覚一本の文頭語に見る特徴—百二十句本、延慶本との比較から—」

読み本系と語り本系とで、擬音語・擬態語(オノマトペ)使用の様相が異なっていることが明らかになった。和語系オノマトペに関して、語り本系は、延べ語数の上では読み本系よりも多く、オノマトペの使用が目立っている。一方、漢語系オノマトペは、読み本系に多く見られ、種類も豊富であった。語り本系は、数と種類が限られており、より一般的な漢語を使う傾向にあった。

② 『平家物語』(研究分担者：中里理子)

「『平家物語』覚一本の文頭語に見る特徴—百二十句本、延慶本との比較から—」

「洗練された文体」と評される覚一本に焦点を当て、同じく語り本系の百二十句本、読み本系の延慶本と比較し、覚一本における文章の展開の特徴を分析した。まず、「さるほどに」「さて」「かくて」の三語の使い分けが明確であることが示した。続いて、指示語では「かの」に注目することで、覚一本と延慶本それぞれにおける使用の相違を確認した。また、覚一本の主語の位置に注目したところ、百二十句本と比べて、目的語等の他の要素に先行するという傾向を示した。

(3) 近世を対象にした研究

① 『古浄瑠璃』(研究協力者：井之浦茉莉)

「『古浄瑠璃』の冒頭表現一覧」

古浄瑠璃は複数の段から成り、各段の冒頭は「さてもそののち」「そののち」などいくつかの定型的な表現で始まる。古浄瑠璃作品を概観すると、その傾向は初期の作品ほど強く、古浄瑠璃が成熟するにしたがい冒頭の表現は多様化しているように見受けられる。しかしそこに着目した研究は管見の限り見当たらない。そこで、本報告書にて、古浄瑠璃各段の冒頭一覧を資料として提示し、今後の研究に役立てることを意図した。

② 『福富草紙絵巻』(研究分担者：染谷裕子)

「談話資料としての画中詞—『福富草紙絵巻』を対象に談話分析の研究方法を試みる—」

『福富草紙絵巻』(春浦院本)の画中詞を談話資料とし分析を行った。画中詞に描かれたセリフに注目すると、その発話機能は、意思表示、情報提供、単独行為要求が大方を占めることが明らかになった。たとえば、意思表示によって状況がよりわかりやすく描写され、情報提供によって物語の経緯が明らかになり、単独行為要求によって登場人物の動きが表現される。つまり、『福富草紙絵巻』の画中詞は、十分に絵の表現と物語の展開を理解した上で、ことばを選び抜き効果的に付したものであると思われる。

③ 『御伽草紙』(研究代表者：高崎みどり)

「『お伽草子』の文章・談話的研究—その“解体”と“再生”の痕と語り手の談話管理」

お伽草子は、先行作品群の“解体と再生”から成立した、と言われている。その解体と再生の痕、特に再生の痕跡が文章談話分析の方法で抽出できるのではないかと考えた。広義のお伽草子 500 編といわれる作品群、成立・流布した時代が南北朝から江戸時代までの 300 年間、さらにインターテクスチュアリティとしての古代から近現代までの巨大な流れの中でちょうど中間地点に位置していることになる。こうした広がりの中で、相互に緩やかな繋がりを持ち、作者・読者、目的・意図、また話型・描写法などにある共通のスタイルをもっていることは、たえず解体と再生を繰り返してきた、お伽草子という運動体の特色といえる。

また、今回対象とした渋川版 23 編各話のテキスト構成については、会話・心内文、和歌、四方四季等類型的表現がテキストの大きな部分を占めていることから、それらを組み合わせ再生した【引用のモザイク】であると考えられる。また、談話分析の典型的な方法である、接続表現を取り上げて、【ストーリー的接続表現とプロットの接続表現】という観点から、「さて」「また」で累加・列挙でつなげていく連綿性と、「さるほどに」で時空を関係づけようとする、あるいは「さりながら」で反転させようとするプロット性の萌芽をみる。

そして、接続表現の周辺的存在である“複合的構成から成る接続表現”や、談話構成の合図となる“談話構成表現”が、ここにいくつか見いだせることを指摘した。そして、享受形態から語り手の存在を想定し、その語り手の談話管理手段、すなわち語り手の露出としての、接続表現、談話構成表現という観点からも考察した。

最後に、まとめとして、“引用のモザイク”が解体再生の痕、そして、それらを関係づける“手”の痕が語り手の露出たる談話構成表現であるという結論を導き出した。

(4) 研究の統括 (研究代表者：高崎みどり)

古典作品を対象として文章談話分析の方法を応用する、というテーマのもとで、3年間、各人の個性ある研究が行われてきた。それらを通観してみると、テキスト中の会話文や語りの文体はどのような様相を示しているか、という観点と、文脈展開に関わる“語り手”の操作としての接続表現という2つの観点が浮かび上がってきた。

前者については、地の文の方が量的にも多く会話文が時々混ざる際の、地の文への会話の取り入れ方に、書き手は微妙なニュアンスを持たせており、そのことが、引用助詞「と」と「など」の使い分けに現れている、という、地の文と会話というインターフェースに関する発見があった。

逆に地の文が全く無い絵巻の「画中詞」のセリフ会話文は、地の文が全く無く絵だけがあるという条件がゆえに、会話の機能が露わになる。特に絵巻の人物(動物)はリアルだが表情に乏しく典型的に描かれることもあって、それを補う形で画中詞が工夫されていることがわかった。また、地の文も絵さえもない、“語り”の文体になると、オノマトペの活躍(特に耳で聞いてよくわかる和語系のもの)が目立ってくるのである。

後者の観点に関しては、副詞的機能を備えていた言語形式が、文脈のなかで接続的機能を獲得する瞬間を捉えたともいえる「かくて」の研究の他にも、時代が下がっても同様に指示語を含む形式「かくて」「さて」「さるほどに」および「かの」が、文章展開に深く関わっていく様相も観察できる。またそうした接続表現・指示表現が定型化して、今日の接続詞、あるいは談話構成語的機能を獲得している現象も観察される。展開のマーカ的役割からさらに、何もつなぐ対象の存在しない冒頭にさえ、“語りのはじまり”を告げて注意喚起する(「注目要求」する)「さてもそののち」が使用されている。

これらの2つの観点には、書き手・語り手の、“より整合性のある形にテキストを仕立てよう”というテキスト構成意識が関わっており、また上記に述べてきた1つ1つの言語現象、特に文脈展開に関わる接続表現をつぶさにみると、書き手・語り手の談話管理とでも言うべき操作のあとが見られるように思われるのである。

古典作品を対象として文章談話分析の方法を援用するという研究手法はまだ試みの段階にとどまっており、さらに深化・拡張し

ていく余地は十分にある。何よりも、そうした近現代語の研究から編み出された手法を、がっちり受け止めて、そうした手法の進展や修正を迫ってくる言語資源としての古典作品群の奥深さになお一層惹かれることとなった。

校務激務の中、研究分担者の先生方は研究代表者を常に叱咤激励し、ご自分たちでどんどん研究を進めてくださった。また、研究補助者の若い方々には、試行錯誤の末に新しい試みを行う面白さを感じ取っていただけたのではないかと思う。篤く御礼申しあげる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

①立川和美 (2013) 『枕草子』日記的章段における引用「と」「など」の使い分け—「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどのことなど」を例として『文体論研究』59, 1-14 査読有

②中里理子 (2012) 「平家物語の擬音語・擬態語—延慶本、覚一本、百二十句本の比較から—」『上越教育大学研究紀要』31, 上越教育大学 199-211 査読有
<http://hdl.handle.net/10513/1449>

③中里理子 (2012) 「覚一本変歎語りの文頭語に見る文章の展開—延慶本との比較から—」『白百合女子大学研究紀要』48, 白百合女子大学 75-91 査読無

④中里理子 (2011) 延慶本『平家物語』に見られるオノマトペ『上越教育大学研究紀要』30, 上越教育大学 167-176 査読有
<http://hdl.handle.net/10513/1089>

⑤井之浦茉莉 (2011) 「古浄瑠璃における冒頭・結尾表現」『人間文化創成科学論叢』14, お茶の水女子大学 9-17 査読有
<http://hdl.handle.net/10083/51634>

⑥中里理子 (2010) 「狂言台本山本東本に見るオノマトペ—浄瑠璃・歌舞伎脚本の比較とともに—」『上越教育大学研究紀要』29, 上越教育大学 207-218 査読有
<http://hdl.handle.net/10513/578>

⑦中里理子 (2010) 大蔵流狂言台本における擬音語・擬態語の特徴—虎明本と山本東本との比較から—『上越教育大学国語研究』14, 上越教育大学国語教育学会 1-13 査読無
<http://hdl.handle.net/10513/747>

〔学会発表〕（計2件）

①立川和美（2012）「テキスト分析から考える『枕草子』日記的章段における「など」の用法―「と」との対比を援用して―」日本文体論学会101回大会（於：日本大学 6月24日）

②中里理子（2011）「平家物語の擬音語・擬態語―延慶本、覚一本、百二十句本の比較から―」上越教育大学国語教育学会（於：上越教育大学 2月19日）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高崎 みどり (TAKASAKI MIDORI)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：60096237

(2) 研究分担者

染谷 裕子 (SOMEYA YUUKO)

田園調布学園大学・人間福祉学部・教授

研究者番号：259178

中里 理子 (NAKAZATO MICHIKO)

白百合女子大学・文学部・准教授

研究者番号：90313577

立川 和美 (TACHIKAWA KAZUMI)

流通経済大学・社会学部・准教授

研究者番号：70418888

(3) 連携研究者

星野 祐子 (HOSHINO YUKO)

(～2010年度)

都留文科大学・文学部・非常勤講師

(2011年度～)

十文字学園女子大学短期大学部・表現文化学科・専任講師

研究者番号：70564110